

2021（令和3）年度 福岡女子大学 一般選抜個別学力検査

〔 前期日程試験問題 〕

国際教養学科

国 語

【 90 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから21ページにあります。問題は全部で**3題**です。
- 3 解答用紙には裏にも解答欄があります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。

問題一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

LINEのチャット画面は、ユーザーの発言がふきだしに包まれたものが一つの画面の左右に連なっていく、スタンプマークや写真はふきだしの外に表示される。その画面デザインは、一つの対話空間をユーザーがともに作りあげていくことを強調するものであり、こうしたデザインが、フィーチャーフォン（「ガラケー」）とは異なり常時ネットに接続して情報をコミュニケーションするスマートフォンと結びつくことで、流れるようにメッセージがやりとりされるタイムラインが可能になっている。こうした技術的特徴と、会話の内容以上に会話が同期しながら続いていく「ノリ」を重視するコミュニケーションスタイルが結びつくことで、空間的にも時間的にもバラバラに行動している人間同士が対面的な会話のようにやりとりする「疑似同期型」のコミュニケーションが生みだされている。そこにおいて、既読マークが出ていないのに返信しない、同期的な対話の進展を阻害する行為が「既読スルー」として対象化され、^②キヒされるようになったと考えられる。

既読スルーという行為は、LINEの技術的特徴によっても、それを使うユーザーの社会的性質によっても完全には説明できない。LINEユーザーの中には、既読マークが出ればメッセージが伝わったと考えてそれ以上の発言をやめるものもいるだろう。会話のノリを重視する人々であっても目の前の人に話しかけられて返事をしないのは端的に「無視すること」であり、LINEとの結びつきがなければ「既読スルー」にはならない。既読スルーは、LINEと人々が結びつくことで生みだされた「LINE人間」という第三のエージェントにおいて、はじめて実行可能な行為となったのである。

私たちは自律的なテクノロジーに操られているわけではない。だが、自律的な私たちがテクノロジーを操っているわけで

もない。私たちはテクノロジーを制御などしていない。むしろ、私たちはテクノロジーへと生成している。ただし、ここでいう「生成 (becoming)」とは、そのもの同一になることを意味するわけではない。市民が銃になるわけでもないし、若者がLINEになるわけでもない。市民は「市民+銃」になり、若者は「若者+LINE」になる。「テクノロジーへの生成」とは、私たちは技術と結びつくことで以前とは異なる存在へと変化するのであり、その変化をあらかじめ完全に理解することも制御することもできないし、現にしていない、ということである。

テクノロジーをめぐる道具説と自律説の対立を支えているのは、「社会と自然」、「人間と非人間」、「主体と客体」を明確に区別し、両者を一方による他方の制御という非対称的なしかたで関係づける近代社会の根幹をなす発想である。前者が後者を制御するとき、自然を解明し改変する科学技術は人間社会が目的を達成するための道具となり、後者が前者を制御するとき、科学技術は人間社会から自律して社会に一方的な影響を与えるものとなる。だが、ラトウールによれば、これらの二項対立は諸領域を切り離しそれぞれに「純化」する近代的発想の産物に他ならない。人間から非人間を切り離すことでテクノロジーはそれ自体に固有の機能やリベンジ性をもつものとされ、非人間から人間を切り離すことでテクノロジーを用いる人間はそれ自体に固有の意志をもつことになる。だが、表向きの純化を維持すると同時に、近代社会は両者を暗黙裡に混ぜあわせることで、たがいがたがいを「翻訳」しながら人間にも非人間にも還元できない新たな行為を生み出す運動を促進している。ちょうど、人々がLINEと結びつくことで「既読スルー」という新たな行為が生まれたように。

特定の最新技術が広く用いられるようになるのは、それが「便利」だからではない。むしろ、多くの人々がその技術と結びつきながら自らのあり方を変容させていくことで、それは便利なものとなる。スマートフォンユーザーには不便に見え

るガラケーは、そのユーザーにとっては依然として便利な道具である。彼／彼女らをスマホへと誘うためには、絶えずアップデートされるアプリやOSを活用し、対面的会話の最中にもスマホをいじってオンラインの対話に参加し、SNSに日常の断片を投稿してシェアするといった、「スマホ人間」としての生きかたを魅力的に示さなければならない。新たな技術が人々を魅了していくプロセスは、その技術と人間が結びついた第三のエージェントへと人々が変化していくプロセスなのである。

このように考えることが妥当なのであれば、現在のAIブームを、知能機械へと生成する試みとして捉えることが可能になる。私たちは、AIと結びつくことで以前とは異なる存在へと変化していく道筋に——その変化をあらかじめ完全に理解も制御もできないにもかかわらず——入りこんでいる、ということだ。なぜそう言えるのか、疑問に思われるかもしれない。科学技術は人類の理性的な営みの産物であり、そのような無計画な試みであるはずがない。そう感じる人も少なくないだろう。

だが、そうした感覚は、テクノロジーと人間が結びついて生まれるハイブリッドを事後的に人間側の意図や必要性に還元する「純化」に基づいている。私たちは技術を制御できないし、現にしていない。人間の非人間への生成を無視する近代的発想を放棄してしまえば、テクノロジーを、劇的に社会を変える革新的な力として捉える（自律説）と同時に、あくまで人間によって利用され制御されるものとして捉える（道具説）という矛盾に満ちた二枚舌はもはや成り立たなくなる。

近い将来、一説によれば二〇四五年頃に、あらゆる知的能力において人間を超えるコンピュータが登場することを予測する「シンギュラリティ」仮説は、二つの暗黙の条件によって成り立っている。第一に、コンピュータの計算力が絶えず向上

することであり、第二に、人間の知的な能力がコンピュータの計算力と比較できる、つまり類比的なものとして把握されることである。したがって、「シンギュラリティ」仮説を一笑に付すことができない現状は、私たちが機械との関係において、この二つの条件が真となるような世界のあり方を肯定し現実化しようとする存在へと変容しつつあることを示している。

コンピュータの計算力とは、1と0の組み合わせによって構成されるデジタルな数列、文脈に依存しないデータを処理する能力である。コンピュータにおける計算力の向上は、私たちの脱文脈的な活動を支援し、拡張し、活性化させる。出自や地縁や血縁といった個人を抑圧する制約を弱め、より自由により多様に個々人の意志や能力を展開させることが肯定される現代世界の規範的発想を内面化している限り、私たちが、コンピュータの計算力を絶えず向上させていく試みを止めるための倫理的な根拠を提示することは極めて困難だろう。

同時に、そのような自由な個人のふるまいを担保しつつそれでも一定の秩序を生み出すために、私たちは、他者が理解できる客観的なフォーマットを通じて自らの行為や人格や責任を明らかにすることをたがいに要求するようになっていく。個人の内面は、もはや文学や日記や精神分析によって私的に探求されるものではなくなり、SNSを通じて常に開示され編集され、共有（「シェア」）されるものへとなりつつある。逸脱的な個人への社会的排除もまた、しばしば既存の道徳規範や法律に基づいてなされるよりも前に、「炎上」と呼ばれる情報と情動の大規模なシェアを通じた排除の構成によって遂行される。SNSに投稿されるキドアイラクを伴う人々の日常の一コマは、コンピュータが処理しうるデジタルな数列へと変換される形式に沿う限りにおいて他者へと伝わる。同時に、よりタサイで自由な自己の表現をデジタルな数列によって補足しうる技術が次々と開発されていく。誰にでも理解できる客観的な情報へとさまざまな人間の営為を変換していく私たちの

「自己」のつくり方自体が、それをコンピュータによる非文脈依存的な記号操作と a 的なものに行っているのである。YouTube上のデータをもとにグーグルのアルゴリズムが「猫」の顔を認識できるようになったと言われる。だが、それは多くの人々が猫の動画をYouTubeにアップロードし、「猫」の一般的なイメージがいまや街角の野良猫よりもオンラインの画像や動画によって形成されているからこそ説得力を帯びている。

* * *

AIをめぐる以上の検討から見えてくるのは、完全には制御できない人間以外の存在との関係を通じて自らを変化させつつある私たちの姿だ。合理的に世界を観察し制御する手段として科学・技術を捉える常識的な見地からすれば受け入れがたいイメージかもしれない。だがそれは人間のあり方としてそこまで突飛なものだろうか？ 実際、人々の営みが完全には制御できない人間以外の存在との関係によって規定されるという状況は、世界中のさまざまな地域に暮らす人々の営みを調査してきた社会／文化人類学の観点から見れば特に珍しいものではない。

多くの人類学者が指摘してきたように、さまざまな動物に囲まれながら人々が暮らす非近代社会では、動物に対する制御可能性と制御不可能性が共存しており、しばしば両者のあいだを現実とも虚構ともつかない存在が繋いでいる。たとえば、エドゥアルド・コーンは、アマゾン川上流域に暮らすルナの人々とジャガーとの両義的な関係性を描きだす。人々にとつてジャガーは身近な存在であり、人間によつて狩られることもあるが、人間を狩ることもある。そのなかには「ルナ・プーマ」（「ルナ」は人格、「プーマ」は捕食者およびその典型であるジャガーを意味する）と呼ばれるジャガー人間もいる。彼らは死んだ近親者など人間の魂をもつジャガーであり、時には人々に食べ物を分け与えてくれるが、人々が狩猟に用いる犬を襲

い、人間を被捕食者の地位に貶める危険な存在ともされる。動物と人間を媒介するジャガー人間は、人々が自らを取り囲む森のさまざまな生物とつきあううえで、重要な思考と行為の焦点となっている。

こうした動物と人間の関係は一見して奇妙に思われるだろう。だが、私たちの生きる近代社会における機械と人間の関係もまた、同じように捉えることができる。機械は身近な存在であり、人間によって利用されるが（故障や事故によって）人間を傷つけることもある。そのなかにはAIやロボットと呼ばれる機械人間もいる。彼らは人間的な知性や身体性を備え、仕事のエンカツ化や多大な利益をもたらすが、人々の仕事を奪い、人間を被支配者の地位に貶める危険な存在ともされる。

⑧ 機械と人間を媒介する人工知能やロボットは、人々が自らを取り囲むさまざまな科学技術とつきあううえで重要な思考と行為の焦点となっている。ジャガー人間と同じく機械人間も厳密に定義できない曖昧な存在であり、その形象は人々との対称的な、どちらが上位とも言えない関係のなかで現れる。たとえば、単なるゲーム・プログラムだとも言える将棋ソフトが、トップ棋士を倒す実力を備えるに至って「AIが人間を超えた」と言われた。

だが、近代社会には、ここで指摘したような非近代社会との類似性を否定する強力な武器が備わっている。それは現実と虚構（フィクション）の区別である。犬や人を襲うジャガー人間がルナの人々がみる夢のなかで懐かしい死者の姿を見せるように、人々の仕事を代替するロボットや人工知能もまた、映画や小説やマンガやアニメのなかで人間と親密な関係を築いてきた。動物人間や呪術師や精霊など、人類学者が「一見して非合理的な信念」の産物として捉えてきた存在の類比物もまた、現実と虚構という区別を無視して近代社会を眺めれば、『スパイダーマン』や『ハリー・ポッター』や『ドラゴンクエスト』などのフィクションのなかに大量に見いだすことができる。だが、近代人は、映画も小説もゲームも身近に存在しない非近

代人に「現実／虚構」という区別を無理やり押しつけることによって、「彼らは精霊など実在すると信じているのか！」と驚くことができる。身近にあるその類比物を指摘されても「これはフィクションとして楽しんでるだけ」と言い逃れできるのである。

ラトゥールは、「社会と自然」、「人間と非人間」、「主体と客体」の峻別によって近代社会は表向きの「純化」を維持してきただけでなく、近代社会と非近代社会という分割をも生みだしてきたと論じている。近代人にとって、自分たちは社会と自然を正当にも区別しているのに対して、非近代人は両者を誤って混同しているように見える。たとえば、社会的に共有された想像の産物にすぎないはずの呪術師や精霊が、あたかも自然の実在であるかのように語られる。両者は区別されなければならない。実在するものは自然科学によって、社会的想像は人文社会科学によって研究されるべき別個の対象である。こうした近代的思考は、非近代社会を探究する人類学にも色濃い影響を与えている。だからこそ、呪術師や精霊は現実^Fに存在するものではなく、人々の主観的な認識の産物、「一見して非合理的信念」として捉えられなければならないのである。一方、フィクションのなかで活躍するスパイダーマン（動物人間）やハリー・ポッター（魔術師）の非合理性が問われることはない。それはフィクションであって現実ではないからだ。だが、その区別自体が近代的思考の産物だとすれば、私たちは何か大きな錯誤^Fに囚われているのではないだろうか？

そもそも、「現実／虚構」という区分は決して盤石⁹ではない。「この作品はフィクションであり、実在する人物、地名、団体等とはいっさい関係ありません」という常套句が逆説的に示しているのは、現実といっさい無関係なフィクションなどありえない、ということである。小説に登場する「中学生」が現実の中学生と、映画が映し出す「ニュータウン」の風景が現

実のニュータウンと、マンガで描かれる「T大学」が現実の東京大学といっさい無関係であれば、私たちは何を見ているのかもわからなくなる。全く関係ないのであれば、わざわざ無関係だという必要はない。この常套句^⑩が示しているのは、近代社会においては——「社会／自然」と同じように——フィクションは常に現実と混ぜ合わされながら区別されなければならない、ということである。

（久保明教『機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ』による）

注 LINE……LINE株式会社の提供するSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）。テキストチャット、音声通話、ビデオチャットなどの機能を搭載。ユーザー数は国内最大で、八千万人を超える。

「市民＋銃」……筆者は、LINEの例の前の部分で、人間とテクノロジーの関係を説明するために、市民が銃を持った場合の例を挙げている。

ラトウール……フランスの哲学者、人類学者（一九四七～）。

エドゥアルド・コーン……カナダの人類学者（一九六八～）。

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 傍線部A「テクノロジーへと生成している」とはどういうことか、文中の言葉を用いて説明しなさい。

問三 傍線部B「非対称的なしかた」とはどういうことか、答えなさい。

問四 傍線部C「特定の最新技術が広く用いられるようになる」ための条件を、筆者はどのように考えているか、説明しなさい。

問五 傍線部D「脱文脈的な活動」がもたらす負の側面について、具体的に説明しなさい。

問六 空欄 a に当てはまる適当な二字の語句を文中から選んで答えなさい。

問七 傍線部E「同じように捉えることができる」とあるが、どのような点を同じように捉えることができるのか、説明しなさい。

問八 傍線部F「大きな錯誤」の「錯誤」とは、どのような誤りか、筆者の考えにもとづいて説明しなさい。

問九 傍線部G「逆説的に示している」とは、どのような点が「逆説的」であるのか、答えなさい。

問十 筆者が「近代的発想」「近代的思考」に属するものと考えて文中で使用している概念を三つ選び、記号で答えなさい。

- ア 疑似同期型 イ 自律 ウ 二項対立 エ 生成 オ 両義的
カ 対称的 キ 純化

問十一 筆者のいう「新たな行為」（5ページ）について、あなたが考える具体的な行為の例を挙げて三百字以内で論じなさい。

問題二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(ただし、設問の都合上、送り仮名、返り点などを省いたところがある。)

有^リ遊^ブ於^ニ子墨子之門^ニ者^一。謂^{ヒテ}子墨子^ニ曰^{ハク}、先生以^テ鬼神^ヲ為^シ明知^ト能^ク為^シ人^ノ

禍福^ヲ、為^ス善者富^シ之^ニ、為^ス暴者禍^ス之^ニ。今吾事^{ツカフルコト}先生^ニ久^シ矣。而^{ルニ}福不

至^ラ。意^{おもフニ}者^一先生之言有^{ルカ}不善^一乎、鬼神不明^{ナルカ}乎。我何故^ノ不得^レ福也。子墨

子曰^{ハク}、雖^モ子不得^レ福^ヲ、吾言何不善^一、而^レ何不明^{ナラン}。子亦聞^{ケリヤ}匿^ス刑徒^ヲ

之有^{ルコトヲ}刑乎。对曰^{コトヘテ}、未^ダ之得^レ聞^{クラ}也。子墨子曰^{ハク}、今有^リ人於^ニ此^ニ、十^{セシ}子、

子能^ク十^{ナガラ}誉^{メテ}之^ヲ而^{シテ}一^ニ自^ラ誉^{ムルヲ}乎。对曰^{ヘテ}、不能^ハ。有^リ人於^ニ此^ニ、百^{セシ}子、

子能^ク終身^ニ誉^{メテ}其善^ヲ而^{シテ}一^ニ子無^カ一^{モスルコト}乎。对曰^{ヘテ}、不能^ハ。子墨子曰^{ハク}、匿^ス

一^ラ者猶有^{ホリ}罪^一、今子所^レ匿^ス者若^ク此^ノ其多^シ。将有^ル厚罪^者也。何福^ヲ求^{メン}。

問一 傍線部A「為善者富之、為暴者禍之」の意味を、主語がわかるように現代語で答えなさい。

問二 傍線部B「先生」にあたる人物名を、本文中の言葉で答えなさい。

問三 傍線部C「我何故不得福也」は、弟子にあたる人物の発言である。この部分の意味を現代語で答えなさい。

問四 傍線部D「吾言何不善」を現代語訳しなさい。

問五 空欄□に入る最も適切な語句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 禍福 イ 鬼神 ウ 子墨子 エ 善者 オ 暴者

問六 傍線部E「匿刑徒」の意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 公共物を持ち去り私物化すること

イ 罪人を密かにかくまうこと

ウ 盗人を私的に懲らしめること

エ 密かに行方をくらますこと

オ 名前を名乗らず他人を中傷すること

問七 傍線部F「子能十誉之而一自誉乎」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十得られた名誉と一つだけ得た名誉とが、自然に並ぶことがありうるだろうか。

イ あなたが十得られたはずの名誉が、自然に十分の一になってしまふ可能性はないだろうか。

ウ 人から十誉められることと自らを一誉めることを、あなたは同等と思えるだろうか。

エ 人を十誉めるのに自分を一しか誉めないことを、あなたは納得できるだろうか。

オ 人があなたを十誉めるとして、あなたは人を一誉めることもできないだろうか。

問八 傍線部G「子所匿者若此其多」について、誰が何を「匿」しているのか、本文に即して説明しなさい。

問九 傍線部H「将有厚罪者也」を「まさにあつきつみあらんとするものなり」と読むにはどのように返り点を付ければよ

いか。解答欄の白文に返り点を付けなさい。

問十 傍線部I「何福求」とは、弟子がどのようにするべきだという答えなのか、説明しなさい。

問十一 「四端説」「性善説」を唱え墨子を批判したことと有名な人物を、次の中から一人選んで記号で答えなさい。

- ア 韓非子 イ 荀子 ウ 莊子 エ 孫子 オ 孟子

問題三は、次のページにあります。

問題三 次の文章は『蜻蛉日記』中巻の一部である。安和二年頃、作者の家に通う夫の藤原兼家は正三位となり、新邸を造

立した。息子の道綱は作者の家で育ち、元服する前に内裏に出仕している。読んで、次の問に答えなさい。

秋は暮れ、冬になりぬれば、なにごとにあらねど、こと騒がしきこちしてありふるうちに、十一月に雪いと深くつもりて、いかなるにかありけむ、わりなく、身心憂く、人つらく、悲しくおほゆる日あり。つくづくとながむるに、思ふやう、

ふる雪にもる年をばよそへつつ消えむ期もなき 恨むる

など思ふほどに、つごもりの日、春のなかばにもなりにけり。

人は、めでたく造りかかやかかしつる所に、明日なむ、今宵なむと、ののしるなれど、われは、思ひもしるく、かくても

あれかしになりたるなめり。されば、げに懲りにしかばなど、思ひのべてあるほどに、三月十日のほどに、内裏の賭弓の

事ありて、いみじくいとなむなり。幼き人、しりへの方にとられて出でにたり。方勝つものならば、その方の舞もすべしと

あれば、このごろは、よろづ忘れて、このことをいそぐ。舞ひ慣らすとて、日々に樂をし、ののしる。出居につきて、賭物

とりてまかでたり。いとゆゆしとぞうち見る。

十日の日になりぬ。今日ぞ、ここにて試樂のやうなることする。舞の師、多好茂、女房よりあまたの物かづく。男方も、

ありとあるかぎり脱ぐ。殿は御物忌なりとて、をのこともはさながら来たり。事果て方になる夕暮れに、好茂、胡蝶樂舞ひ

て出で来たるに、黄なる単衣脱ぎてかづけたる人あり。折にあひたるこちす。

また十二日、しりへの方人さながら集まりて舞はすべし、^Aここには弓場なくて悪しかりぬべしとて、かしこにののしる。

殿上人数を多くつくして集まりて、好茂埋もれてなむと聞く。われはいかにいかにと、うしろめたく思ふに、夜ふけて、送り人あまたなどしてもものしたり。さて、とばかりありて、人々あやしと思ふに、はひ入りて、これがいとらうたく舞ひつること語りになむものしつる、みな人の泣きあはれがりつること。明日明後日、物忌、いかにおほつかなからむ。五日の日、まだしきに渡りて、ことどもはすべしなど言ひて、^(い)帰られぬれば、常はゆかぬこちも、あはれにうれしうおほゆることかぎりなし。

その日になりて、まだしきにもものして、舞の装束のことなど、人いと多く集まりて、し騒ぎ、出だし立てて、また弓のこ^③とを念ずるに、かねてよりいふやう、しりへはさしもの負けものぞ、射手いとあやしうとりたりなどいふに、舞をかひなくやなしてむ、いかならむいかならむと思ふに、夜に入りぬ。月いとあかければ、格子などもおろさで、念じ思ふほどに、これかれ走り来つつ、まづこの物語をす。いくつなむ射つる、敵^{かたき}には右近衛中将なむある、おほなおほな射伏せられぬとて、ささとの心に、うれしうかなしきこと、ものに似ず。まけものとさだめし方の、この矢どもにかかりてなむ、持になりぬると、また告げおこする人もあり。持になりなければ、まづ陵王舞^{りやうわ}ひけり。それもおなじほどの童にて、わが甥^{むす}なり。慣らしつるほど、ここにて見、かしこにて見など、かたみにしつ。されば、次に舞^(は)ひて、^④おほえによりてにや、御衣たまはりたり。内裏よりはやがて車のしりに陵王も乗せてまかでられたり。ありつるやう語り、わが面をおこしつること、上達部どものみな泣きらうたがりつることなど、かへすがへすも泣く泣く語らる。弓の師呼びにやり、来て、またここにてなにくれとて物かづくれば、^E憂き身かともおほえず、うれしきことはものに似ず。

(『蜻蛉日記』による)

注 内裏の賭弓……帝の前で、二つの組に分かれて行う弓の競技。勝った方の組が舞人として舞楽を披露する。

しりへの方……弓の射手となる前後の二組のうち、後手組。

賭物……優れた者に与えられる賞品。ほうび。 試楽……舞楽の予行。 かづく……ほうびとして与える。

胡蝶楽、陵王……舞楽の曲名。 弓場……弓射の施設。 五日の日……賭弓の当日。 持……引き分け。

問一 文中の陰暦の月名「十一月」「三月」の異名を、それぞれひらがなで書きなさい。

問二 文中の語句「物忌」「単衣」「上達部」の読みを、それぞれひらがなで書きなさい。

問三 波線部①～④の語句の意味を、本文に即して書きなさい。

- ①いそぐ ②らうたく ③念ずる ④おぼえ

問四 二重傍線部(1)「人」、(2)「幼き人」、(3)「殿」、(4)「われ」は誰のことか。あてはまる人物を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号が重複してもよい。)

- ア 帝 イ 藤原兼家 ウ 作者 エ 藤原道綱 オ 多好茂 カ 殿上人 キ 女房

問五 傍線部A「ここ」とはどこか。あてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 内裏 イ 兼家の新邸 ウ 作者の家 エ 好茂の家 オ 甥の家

問六 点線部(い)「帰られぬれ」、(ろ)「思ふ」、(は)「舞ひ」の主語は誰か。あてはまるものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号が重複してもよい。)

ア 帝 イ 藤原兼家 ウ 作者 エ 藤原道綱 オ 多好茂 カ 作者の甥 キ 弓の師

問七 傍線部B「舞をかひなくやなしてむ」とは、誰が何に対してどのようになっているのか、説明しなさい。

問八 傍線部C「月いとあかければ、格子などもおろさで」を現代語訳しなさい。

問九 傍線部D「わが面をおこしつること」とは、誰の面目がどうなったことか、本文の意味に即して答えなさい。

問十 傍線部E「憂き身かともおほえず、うれしきことはものに似ず」とは、①誰の気持ちか、②なぜそのように感じるのか、説明しなさい。

問十一 文中の和歌の空欄 にあてはまるものを、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手をぞ イ 月ぞ ウ 子をぞ エ 弓ぞ オ 身をぞ

問十二 『蜻蛉日記』以前に成立した作品を次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十六夜日記 イ 和泉式部日記 ウ 更級日記 エ 土佐日記 オ 紫式部日記 カ 明月記